

## 刊行に寄せて

1921年に渋沢敬三によって創設された「アチックミュージアムソサエティ」は、戦後の財団法人日本常民文化研究所の時代を経て、1982年に神奈川大学に移管されました。神奈川大学日本常民文化研究所では、創設時以来の理念を受けつぎ、「常民」の等身大の生活文化を明らかにするため、民具や古文書の収集・整理、漁村・漁業史研究をはじめとする多様な領域を対象に、幅広い活動を展開してきました。その調査・研究にあたっては、創設者渋沢敬三がとなえた“ハーモニアスデヴェロップメント”の精神に基づき、異なる分野の研究者が協働で行う共同研究を推進してきました。また、地域で孤軍奮闘する研究者や若手研究者の調査・研究を支援するための制度を導入して、研究の活性化と進展をはかっています。2010年度からは、在野の研究者などの研究の一助となるよう、「常民文化奨励研究」としてグループによる課題研究を募集することといたしました。従来、この奨励研究は研究所本体の事業として推進されてきましたが、2015年度より国際常民文化研究機構の事業へと移行しました。今回刊行する神奈川大学日本常民文化研究所調査報告第28集は、移行後4冊目の成果となります。

さて、本共同研究『昭和戦前期の青年層における民俗学の受容・活用についての研究』（研究代表：丸山泰明 研究期間：2017.4.1～2020.3.31）は、1920～30年代において、当時形成されつつあった民俗学が農山漁村の青年たちにどのように受容され、郷土の生活・生業の考察と改善に活用されたのかについて明らかにすることを目的とし、青年団の中央組織である日本青年館および大日本聯合青年団の事業に焦点をあわせ、事業にかかわった青年と、青年に期待した知識人の取り組みについて論究したものです。

民俗学の大成者、柳田国男は五感を総動員しての学び、旅の効用や現実の政治に目を向けることを当時の青年に熱く説きました（『青年と学問』1928）。本報告書は論考篇と資料篇の二部構成ですが、従来、正面から取り上げられてこなかったこの方面に初めて光を当てたといえます。本書を手にし私自身、三田の日本常民文化研究所で、河岡武春先生を介して、ここで論及されている大西伍一さん（『土の教育』1926、『日本老農伝』1933など）に面識を得、私たちの研究会にもお招きしたことがあり、そのような折、なぜもっと話を伺っておかなかったのかと悔やまれます。いずれにせよ、本書は、民俗学界のみならず、現代社会における成年、成人論議に一石を投じることになるでしょう。

改めて、2年間という短い時間と限られた研究費のなかで執筆にあたられた研究メンバーの皆様に、心よりお礼を申し上げる次第です。

2020年2月

神奈川大学日本常民文化研究所長  
国際常民文化研究機構運営委員長

佐野 賢治